

經濟論叢

第九十卷 第四號

ストレーチーの帝國主義論（序説）…… 静 田 均 1

アルファデルフィヤ・

アツソシエーション…………… 穂 積 文 雄 18

プレハーノフのロシア資本主義論(≡)… 田 中 真 晴 40

アメリカにおける公益

事業の料金形成の一過程…………… 野 村 秀 和 66

昭和三十七年十月

京 都 大 學 經 濟 學 會

ストレーチーの帝国主義論（序説）

静 田 均

一

ジョン・ストレーチーといえは、日本の読書界ではもうかなり馴染みの深い名前であり、すぐにあれかと肯づく人が多いであろう。あらためて紹介するまでもなく、フェビアン・ソージャリストで、イギリス労働党きつての理論家だ。一九〇一年の生れだというから、今年はかぞえ年で六二歳になる勘定である。名門の子弟にふさわしく、型通りイートンからオックスフォード大学に進み、一九二八年の総選挙に労働党から出馬して、みごと栄冠を獲得、下院に議席をしめたが、その後いったん離党し、三〇年代の終りに復党した。戦後ノトリー内閣が成立すると、入閣して食糧相や陸相の要職についた。政治家としても相当な閥歴の持ち主だが、それはいま問題とする必要はない。ここでは、思想家・理論家としての彼が問題である。

ひろく知られているように、一九三一年はイギリス労働党にとって重大な『危機』を意味したが、同じ年の総選挙に打って出たストレーチーは、不運にも落選の憂き目をみた。しかし、それにもめげず、彼は矢つぎばやに数多くの著書を公刊し、ジャーナリズムの世界では、まさに時代の寵児となった観がある。G・D・H・コールの記すと

ころによると、当時、労働党の左派の人たちが結成したレフト・ブック・クラブ（Left Book Club）には、二人のすぐれた指導者があつた（*A History of Socialist Thought, Vol. V, Socialism and Fascism, 1931-1939, 1960, p. 83.*）。
ルード・ラスキとジョン・ストレーチーである。彼らは相携えて左翼的思想の宣伝につとめ、めざましい活躍を演じた。登録失業者が一二〇方から二五〇方に跳ねあがり、異常な緊張につつまれた社会的雰囲気、ファシズムの台頭という騒然たる情勢に促されて、穩健な労働党の内部でも、一部の分子は、これまでの生温るい漸進主義（*gradualism*）にあきたらず、いきおい急進的な方向にはしろうとした当時のことである。ストレーチーは文筆の才にたけたばかりでなく、また口舌の雄でもあつたから、労働組合員やインテリゲンチヤに受けがよく、とくに若い青年層の人氣を集めたといわれる。『采たらんとする権力のための闘争』（*Coming Struggle for Power, 1932.*）は、その時分の彼の代表作であつた。思想的に、マルクス・レーニン主義に接近してゐたことは、疑いなく、生粋の共產主義者になりきつたわけではなく、ファシズムに抗して、人民戦線運動に身を挺したとはいへ、しよせんは同調者であつたと解してよいだろう。

かようにいったん左傾した彼ではあつたが、自分でも公言するとおり、一九三八年ごろから方向を転換した。そして第二次大戦後の今日では、民主社会主義の理論的チャンピオンをもつてみずから任じ、あいつも変らず健筆をふるっている。才人といへばたしかに才人にちがいないが、それにしても彼の転向を促したものは何であつたらうか。わたしは少くとも二つあると思う。いわゆるケーンズ革命の影響をうけて、経済理論のうえで修正の必要を感じると同時に、戦後における資本主義の顯著な変貌に遭遇して、完全雇用と安定的成長の可能性を信じ、再出発の決意をかためたことが、おそらくその一つであらう。一九三九年の独ソ不可侵条約の締結とそれに続くポーランドの分

割は、自由諸国の知識人に大きな失望を与え、千のひらを返すようなソビエトの態度の豹変に強い不信を抱かした。だが、ストレーチーもその一人ではなかつたらうか。たとえそうでなかつたとしても、戦後アトリー内閣の一員として、マインシャル・プランをめぐるソ連外交の内幕を嫌やというほど見せつけられたという身近かな体験が、直接の契機となったことは、たしかであり、かつてはほとんど盲目的に心酔の的としたソビエト・ロシアにたいして、次第に冷静な批判的態度をとらざるをえなくなったということが、考えられる第二の理由である。

いづれにせよ、ストレーチーが容共的な立場から反共的な立場に転替えたことだけは、間違いない事実だ。

彼は、『なぜ社会主義者たるべきか』(Why you should be a Socialist, 1944.)の日本版の中で、旧著の内容に二つの重要な改訂をおこなったと告白している。『本書は第二次大戦中に書かれたものである。わたしは、非常に多くの人々と同じように戦争終了後は、ソ連とのあいだに高度の協力を実現することができるものと信じていた。その希望は無残にも裏切られた。ここは、世界が冷めたい戦争にはいつたのは誰の罪かということ論すべき場所ではない。もちろん、一九四五年から一九五一年までイギリス政府の一員であったわたしは、なによりもまず、ソ連政府の責任だと考えている。だが、どっちも冷めたい戦争の存在は、あまりにも歴然たる事実であり、わたしは約十年前にソ連について書いた個所は、今日では世人を誤解に導くであろう』(宮地健次郎訳『なぜ社会主義をえらぶか』昭和二八年 日本版への序文)。すなわち原著は第二次大戦の直前、人民戦線運動の一翼をになって出版された同名のパンフレットの改訂版なのだが、邦訳にさいして著者ストレーチーから、原著の一部を削除したい旨を申しいられてきたという。削除された主な部分は、ソ連の実状を述べた第十二章『わたしは未来を見た、それは動いている』の全章であるが、なおそのほか、社会主義の実例としてソ連をあげている個所、社会主義者と共産主義者を同一陣

党内に在るものとしてならべている個所などは、いずれも根こそぎ削除されたのであった。こうした事実があげずに語っているように、かつてはソ連にたいして深い憧憬と熱情的な好意をよせた彼であったが、今日では理論的にも実践的にも共産主義と明確に一線を画するにいたった。われわれは、このことをまず心に留めておかねばならぬ。

戦後のイギリス労働党は、レーニン主義に近い新左派(New Left)とケーンズ流の新自由主義に近い新右派(New Right)に分れており、新左派は新マルクス主義者(neo-Marxist)とも呼ばれるが、ストレーチーは元マルクス主義者(ex-Marxist)ではあつても、新マルクス主義者の中にはかぞえられていない。経済学としてはマルクスとケーンズの折衷論をとり、政治的には左右両派のあいだにあつて中道をあゆもうとするものごとくである。理論における経験主義と実践における漸進主義というのが、フェビアン（フエビアン）の伝統だとすれば、彼はまわりまわつてその伝統に立ち帰つたのだと見ることもできよう(L. Labedz, *Revisionism. Essays on the history of Marxist ideas*, 1962, p. 301.)。

しかし戦前のストレーチーを知っている人たちの眼には、これは驚くべき変貌として映ずるかもしれない。もつとも、こうした変貌は、あながちストレーチーだけに限るわけではない。われわれは晩年におけるラスキを思い浮べることができる。彼ははやくからイギリスにおける最も進歩的な政治学者として知られ、とりわけソ連にたいして好意的であり、弁護的であつた。終戦の前年に刊行された『信仰・理性・文明』(Faith, Reason, and Civilization, 1914)の中で、米ソの協調による世界の再建に大きな期待をかけていた彼も、戦後日ましに募る冷戦の激化を眼前に直視するにおよんで、旧著の改訂の必要を痛感せざるをえなかつた。だが、書きはじめられた彼の原稿は、一九五〇年に見舞つた思いがけぬ彼の急逝により、永遠の未定稿として後に残された。それはやがて『現代のシレンマ』

(*The Dilemma of Our Times*, 1952. 大内兵衛・大内節子訳『岐路に立つ現代』昭和三五年)と題し、同僚クラークの手で出版の運びにこぎつけたが、この遺著をひもといたものは誰しも、ラスキが以前とは打って変わったように、ソ連にたいして忌憚のない露骨な批判をあげているのを発見して、おそらく一驚を喫するであろう。しかもその執筆がハンガリー事件(一九五六年)にさきだつ六年も前のことであるのを考えると、われわれの驚きは、さらに倍加するにちがいない。

ともあれ、いったん共産主義に深く帰依したものが、後になって幻滅を感じ、何らかの動機で改宗し転向すると、こんどは逆に真向から共産主義に不信を投げつけることは、しばしば見かけるところである。それはある意味で転向者の通有性といえるかもしれない。しかしストレーチーはそうした転向者たちと、おのずから選を異にする。『わたしは』と彼はいう、『いまでは共産主義者の無謬性の主張を受けられる気持はもっていない。しかし、その反面でマルクス主義を全面的に放棄することも気がすまない。わたしは依然として、きわめて重要な鍵がそこにあると信じてゐる』(*The Great Awakening*, p. 5-6. 河上民雄訳『大なる覚醒』昭和三七年三二—三三ページ)。これはストレーチーの偽らぬ本音であろう。反共というのと、かく感情に走りやすいヒステリックな性格を連想しがちだが、ストレーチーの著作には全体を通じて、そういったどぎつい論調はほとんど見あたらない。転向者というよりは、むしろ修正主義者のカテゴリーにはいる人なのかもしれない。

二

ストレーチーは数年このかた『民主社会主義の原理にかんする研究』と銘うって、つぎつぎにその労作を世に問

うてゐる。『現代の資本主義』(The Contemporary Capitalism, 1956、関嘉彦・三宅正也訳「現代の資本主義」昭和二三年)はその第一巻であり、『帝国の終末』(The End of Empire, 1959、関嘉彦ほか訳「帝国主義の終末」昭和三七年)はその第二巻をなす。これら二つの労作は、取扱ったテーマが異なるところから、一見それぞれ独立した関連のない書物のように見えるかもしれない。しかしストレーチーにいわせると、実は『シャムの双生児』のごとく、胴体のところで切っても切れぬように結びついているものである。前者は英米などの『ゆたかな社会』を念頭においた現代資本主義の構造分析であつて、国際的関連はいちおう捨象されている。いわば意識的に課せられたこの限界を突破し、現代の資本主義をば国際的視角から、とくに後進国との関連に注意を払いつつ、あらためて見直そうとするのが、後者だといつてよい。

わたしは以下においてストレーチーの帝国主義論を取扱うにあたり、彼の主著の一つである『帝国の終末』をおもた対象とするつもりだが、なおそれに付随して二つの小篇を顧みないわけにはいかない。その一つは、彼が『新フビアン論集』(The New Fabian Essays, 1953、社会思想研究会訳「社会改革の新構想」昭和二九年)に寄せた『イギリス労働党の課題と業績』(Tasks and Achievement of British Labour)という論文であり、もう一つは昨一九六一年シンガポールでおこなった講演の要旨『大いなる覚醒』(別名「帝国主義から自由へ」From Imperialism to Freedom)と題するパンフレットである。ともに主著にたいして補充的な役割を果すものといつてよいが、とりわけ後者は、『帝国の終末』のエッセンスを通俗むきに圧縮したものと見ることがができる。それだけに大筋をてつとりばやく理解するには便利であろう。しかし学問的な価値という点になると、『帝国の終末』の方が数等まさっていることは、いうまでもない。

すでに一言したごとく、戦前のストレーチーは、いちじるしくマルクス・レーニン主義の路線に接近していた。したがって帝国主義にかなする独自の見解というほどのものはなく、理論的にはもっぱらレーニンに依拠していたといつてよい。このことは、一九三〇年代における彼の諸労作を顧みるならば、たゞどこかに判明するであろう。

しかし最近のストレーチーは、すでに旧殻を蟬脱して、民主社会主義の立場に乗りかわつてゐる。改宗した彼は、もはや既成の学説の固陋なる信奉者ではない。みずからの頭脳をもつて思索を深め、新しい構想を練りあげる自由をとりもどしたはずである。その限りに於いて、今日の彼がレーニンと所見を異にするにいたつたとしても、別に不思議はないであろう。彼の本領は帝国主義の概念規定や問題意識のうちに鮮かに看取することができる。

われわれは、まず帝国主義の概念規定について見よう。というのは、帝国主義の概念はひとによつてまちまちであり、この点を明かにしておかないと、無用の誤解や混乱をひきおこす惧れが多分にあるからだ。ストレーチーによれば、帝国主義とは『ある民族または人民が、他の人民または民族を征服し、従属 (subdue) せしめ、しかるのち (法律上たると事実上たるとを問わず) 永久に支配 (dominate) する過程』であり、他方、帝國とは『このようにして確立された事態 (state of things)』にほかならぬ。これをわれわれ自身の言葉で再現するならば、帝国主義と帝國とは形影相伴うがごとき関係にあり、前者は行動の面からダイナミックな過程として把握されるに反し、後者は既成の秩序として観念されるということができよう。右に掲げた帝国主義の概念とレーニンのそれとのあいだにかなり大きな懸隔があることは、きわめて明かであつて、ここで多くを論ずるまでもない。のみならず、レーニンを離れてもなお異論の余地はあるであろう。ストレーチーは起りうべき異論にたいして先手をうたんとするかのやうに、あらかじめ予防線をはつていう、——もちろん帝国主義をもつと狭い意味に限定しようとする人もある

にちがいない。そういう人は、過去一世紀にわたって存在したような現代の資本主義的帝國主義を思い浮べるであらう。しかし通常の用語例では、もっと広い意味に理解しており、誰でもがローマ帝國やローマ帝國主義について語っているのだから、それほど狭く限定することは適當とは思えない。さらにある人々は、白色人種と有色人種といったような人種を異にする人々にたいし、海を越えておこなう支配のみを意味せしめようとするかも知れない。しかしこのような定義は、典型的に帝國主義的な行動であったロシア皇帝によるコーカサスの併合を除外する結果をもたらす。最後に、帝國主義はある民族による他民族の搾取であると解釈するひとも多い。しかし帝國主義は、単なる戦争や征服とは異なることに留意しなければならぬ。文明以前にも侵略戦争は頻繁におこなわれていたが、その時代にはまだ帝國の建設は不可能であった。帝國主義および帝國という言葉は、一民族による他民族の征服というだけでなく、その継続的な支配への意図を含んでいることが必要である。それは、侵略行為すなわち戦争そのものと同義語と見なされることから防ぐに足るものでなければならぬ、等々。

ストレーチーは、ノッシアのような奴隸所有者である比較的素朴な民族による征服についても、一九世紀後半のイギリスに見るような複雑高度の民主的資本主義社会による領土の獲得も、一様に帝國主義と呼ぶ。彼は支配國家の社会構造・階級関係のいかんを問わず、征服とか統治とか領有とかいう要素を重要視し、あらゆる時代を通じて妥当する定義をつくりあげた。したがって帝國主義にかんする彼の定義は、幅のひろい意味合いのものである。それはそれで一応肯づけるが、しかしその結果、帝國主義のあらゆる歴史的形態に共通な要素だけが、念頭にのぼり、現代帝國主義にとって決定的に重要な特質を看過する恐れは、ないであらうか。また彼の定義は形式主義に傾くあまり、實質を閑却する帰結を生むことはないであらうか。

端的にいえば、ストレーチーの観念する帝国とは、植民地を領有する国家、つまりコロニアル・エンパイヤ（植民帝国）のこのようであり、また帝国主義とはコロニアリズム（植民地主義）ないし植民地支配にほかならぬように思われる。そこでは、主体的地位にある特定の民族または国家と、それをめぐり、その下位にたつ他の民族または地域とのあいだの支配従属の関係が核心をなすわけだが、この支配従属の関係は、軍事力を含む政治的権力を媒介とすることは、いうまでもない。この点は彼の叙述に徴してきわめて明かである。だが、たとえば資本による経済的支配従属の関係は、いったいどうなのかということになると、あまり明確ではない。資本による支配従属の関係は、必ずしも戦争に訴えることを必要としないし、また国土の領有を必要ともしない。むしろ平和的な手段を通じて、勢力の浸透がおこなわれうる。しかも経済的依存度が高ければ高いほど、實質的に支配従属の関係が成立するであろう。たとえばドル帝国主義などという場合には、厳密な意味の植民地ではなくても、いわゆる半植民地という曖昧な関係をも含めて理解しているようだが、ストレーチーはともすると、これに眼をつぶろうとするかのように見える。抽象的・一般的な定義そのものは、いわば容器にすぎず、問題はその中にもられた内容のいかにある。定義そのものには、法律上の関係だけでなく、事実上の関係を含むとなつていても、実際に適用する段になると、事実関係のあるものが除外される嫌いがあり、真相を捕捉するうえに欠くところありはしないか。わたしはこの点に一抹の不安をもつ。

三

われわれは前節において、帝国主義にかんするストレーチーの定義が、古代から近代にわたる各時代を貫いて通

用するほど幅の広い意味合いのものであることを見た。しかし、だからといって、彼が帝國主義の超歴史性を信じているということにはならない。むしろ帝國主義は、人類の歴史のある段階においてはじめて発芽し、その後いくたびか消長をかさね、今世紀の初頭に最後の満開期に達したが、現代はまさにその没落期に際会していると考えるのである。そこで、まず帝國主義の歴史の起源はいつかが問われなければならない。

ストレーチーによると、帝國主義は未開野蠻の原始時代には存在しなかった。それは文明の曙光がさしそめてから、はじめて姿をあらわした。技術の発達にともない、物的生産力が一定の水準に達し、人間が生きるための消費以上の余剰を生産しうるようになるまでは、経済的搾取は起りえない。また人口が稀薄なときは、外部にむかって活動領域を拡大する必要は存在しなかった。他民族の支配は、何らかの手段による経済的搾取を目的としてはじめて追求される。『最初の帝國の確立は、剰余を生産する奴隷あるいは労働の適切な供給を確保しようという試みの結果として生れた。国内人口の一部も奴隷化されたことは事実である。しかし、この国内の供給は、他の民族の従属化に訴えない場合は、明かに不十分であった。こうして端緒的形態における帝國主義は、外国に適用された奴隷化であると呼んでもさしつかえないであろう。そして国内人口の一部の奴隷化は、国内帝國主義 (internal imperialism) の一種であると呼んでもいいであろう』(『終末』原本三二二ページ、訳本四四三ページ)。

帝國主義の起源にかんし経済的搾取の可能性に注意をむけたことは、マルクスおよびエンゲルスの卓絶した創見であるとして、ストレーチーは最上級の言葉でほめちぎっている。マルクス、エンゲルスが階級や国家の起源を剰余生産物の生産や経済的搾取の成立と結びつけて解明したことは、周知の通りであるが、帝國や帝國主義の起源にまで論及したかどうかは、いささか疑問である。これはむしろストレーチーの拡張解釈ではないかと思う。

さて過去の歴史をふりかえってみると、帝国はいくどか興隆し、またいくどか衰亡した。同じように帝国主義も、あるときは高潮し、あるときは退潮した。そうした歴史の波瀾曲折をたどると、およそ三つのパターンを区別することができる、とストレーチーは説く。(一) 奴隷労働に基礎をおいた端緒的奴隷帝国、(二) 略奪的商業に基礎をおいた商業帝国、すなわち重商主義的帝国、(三) 十分に發展した資本主義的帝国が、それである。われわれは帝国を帝国主義と読みかえたとしても、おそらく彼から抗議をうける気遣いはないであらう。

ところで第一のパターンに属するものは、紀元前数千年にさかのぼるバビロン、アッシリア、エジプトなどの諸帝国をはじめとし、くだってはアテネ、マセドニア、ペルジア、カルタゴ、ローマなど、要するに古代の諸帝国であるが、とりわけローマ帝国は最も盛大で数世紀にわたって存続したから、典型とするに足りる。つぎに重商主義的帝国主義の例として、ストレーチーはベニスやポルトガルをあげるほか、典型的なものとして一八世紀後半におけるイギリス東インド会社の活躍をとりあげ、さらに一九世紀後半にまで視野を拡大し、かなり詳細な分析を試みる。最後に資本主義的帝国主義は、一九世紀の七〇年以降における列強の植民地獲得競争を指し、典型的な事例として、イギリスのエジプトおよび南アフリカへの進出を描いている。ストレーチーはインドに関してはクライブ、ヘースチング等、エジプトに関してはクロマー、南アフリカに関してはミルナーというように、歴史の檜舞台ではなばなしの主役を演じた第一級の魅力ある人物を登場せしめ、彼らの事業と所信を展開することによって、巧みに読者を彼の結論にまで誘うのだが、生彩にとんだ怪妙な筆致は、読んでいてもまったく厭しい。

もちろん彼は、歴史家をもってみずから任ずるものではない。『帝国の終末』は、かなり多くのページを歴史的叙述に割いているとはいえ、けっして本格的な歴史書ではない。従つてその方面の専門家の眼から見れば、おそら

く食い足らぬ点が多々あることであろう。インドに關してはともかく、エジプトやアフリカについては、文献の涉獵もかざられており、しよせんはセミ・プロフェッショナルの域を出ないといつたたくいの批評もきかれる。しかし、わたしの関心はそういう点にあるのではない。むしろ彼が歴史分析に臨んで示した根本の態度はどうか、あるいはそれを通じてどんな結論をひきだそうとしたかにある。こうした角度から、できるだけ簡潔に要点を整理してみよう。そうすれば、ストレーチーの問題意識がより鮮明に浮びあがるであろうから。

四

過去の事實の示すところによると、反帝國主義者たちはひたすら帝國主義を根本惡として完膚なきまでにこきおろすのが、つねであつた。逆に親帝國主義者たちは、あらゆる大言壯語をもつて帝國主義を鼓吹してやまなかつた。弾劾にあらずんば礼讚——そういうのが、通り相場であつたといつてよい。しかし、いずれの態度もストレーチーのとらざるところである。『一例をあげれば』とストレーチーはいう、『インドにおけるイギリス帝國は、罪深いと同時に恩恵を施しており、暴力、裏切り、そして飽くことを知らない貪慾によつて建設されたが、同時に比類のない大胆さ、ゆるがない決断によるところも大であつた。それはインドを統一し、かつインドを分割した。それはインドを荒廢させたが、同時に近代インドを創造した。それは利己的で没我的で、破壊的で建設的で、光榮に包まれ、かつ怪奇な存在であつた。このような出来事を稱賛することも、糾弾することも、けっきよくは無意味である』(『終末』原本一三三ページ、訳本五一六ページ)。

多くの社会現象がそうであるように、帝國主義もまた明暗二筋道の交錯よりなりたつ。マイナスの面もあると同

様にプラスの面もある。大局的な見地にたつて判断すれば、功罪相半ばするといえるかもしれない。しかしストレーチーは、そうした安易な諦観に満足しようとするものではない。たとえ彼は、インドにおいてイギリスの果した破壊的であると同時に、『再生的な(Regenerative)役割』を分析した最初の人として、マルクスを激賞する。マルクスはイギリスのインド征服がどんなに残酷なものであつたにせよ、何らかの形で遂行されねばならぬ役割を、破壊的な側面においても果したことを強調した。まずイギリスの略奪的商業の到来により、ついでイギリスの機械製商品の到来によつて、破壊されていったインドの自給自足的な村落共同体について、すこぶる興味ふかい説明をおこなつた。しかし彼は、この過程がどんなに悲嘆を伴つたにせよ、共同体の崩壊をもつて遺憾とするというだけで済ますことはできなかった。というのは、何ものかがこの老朽した静態的な社会的基盤をうちくだかない限り、インドにおける成長はありえないと考えたからである。単にそれだけにとどまらず、彼はさらに一步を進め、インドにおけるイギリスの統治が『再生的な役割』を果すであらうと思われる諸点を列挙した。そして最後にこの再生的側面の範圍と限界を要約した。

以上のごとく、ストレーチーはマルクスの功績を高く評価する。しかし、それにも拘らず、無条件的にマルクスをそのまま鵜のみにしようとはしない。彼は、マルクスがイギリスの統治の破壊的側面を誇張したばかりでなく、同時に再生的側面を誇張したと考える。そして真の批判はアジア的社会の停滞を効果的に打破しなかつた点、イギリスが適時にインドの工業化を促進しなかつた点にあると喝破する。発想においてはマルクスに同調しながら、射程の測定にかんしては若干の距離があるというのだ。

ストレーチーによると、一九世紀の四〇年代に木綿手織り工の白骨がインドの平野で野ざらしになつたと伝えら

れるあの荒廃は、ランカンジャーの機械織り綿布の競争によって惹起されたものである。破壊の中に秘められた再生の可能性は、機械化された近代工業の創出であるべきだが、その過程はイギリス本国でまさに進行中のものであつて、インドで機械制繊維工業が設立されたのは、ようやく二〇世紀の初頭になつてからのことであつた。その間に横たわる数十年のギャップは、致命的な影響をインドにおよぼした。手織り工業は破壊されたが、それにとつて代るだけのものが成長しなかつたので、埋合せがつかなくなつたのである。やつと工業化が緒についてからでさえ、インドの国民全体が工業化のもたらした直接の利益を生活水準の向上という形で享受しえたかどうか、すこぶる疑わしい。『以上のことは要するに、従属国民がつねに経験するところのゆがんだ発展の最も重大な、しかし長い間あまり注意されなかつた特徴のもたらした結果であつた。もちろん、それはこれら従属国がまったく昔ながらの姿で残つてゐるという意味ではない。それどころか法と秩序は確立され、鉄道は建設され、疾病は克服もしくは緩和され、農民は保護されるかもしれぬ。だが、それにも拘らず、もし急速な工業発展がこれに伴わない場合、領民地の状態が、最後の段階においても、最初の段階より、実際にはある点でかえつて悪化するかもしれないのである。』といふのは、帝国主義支配の積極的な特徴が生み出す最大の効果は、人口の継続的かつ急速な増加であつて、もしこの人口増加に見合う全面的な工業発展がないならば、起りうべき恩恵もことごとく増加人口に呑みこまれてしまふからだ』（『終末』原本五三ページ、訳本六七ページ）。これはたしかに傾聴にあたひする提言であると思ふ。

総じてストレーチーの叙述は、残酷物語のマンネリズムに陥ることなく、閑却されがちな歴史の側面にも、できるだけ照明を与えようとする態度で貫かれている。皮層的、一面的な観察に終ることなく、バランスのとれた物の見方に徹しようとする意欲とそれを裏づける技巧とは、彼の老成と円熟を語るものといえよう。

さてつぎの問題は、帝國主義的膨脹は何を最も有力な動機とするかということである。ストレーチーは各時代の帝國主義を通じて、經濟的要因を重要視しているようだが、とりわけ一九世紀七〇年代以降の『新しい帝國主義』資本主義的帝國主義の場合において決定的な意義をもつと考えているらしい。われわれはさきにこの期の典型的な事例として、ストレーチーがエジプトと南アフリカに起つた事件をあげていることを指摘した。この二つの事件は、異つた経緯をたどつたとはいへ、ある点で共通したところがある。というのは、イギリスの民間資本の海外投資に伴う權益を守るために、イギリスの國家権力が発動され、その結果、相手國を政治的に支配し、従屬せしめるにいたつた事件だからである。そしてその限りで一直線に、一九世紀における帝國主義の新しい波は主として經濟的動機（とくに海外投資をめぐる）によるものであるとの結論に到達しそうに思われるのだが、しかしストレーチー自身は、必ずしもそのように簡明直截に割切つてはいないのである。

『だが一方』、と彼は書いている。『南アフリカとエジプトの二つの例は、一八七〇年前後からの世界を併呑した新しい帝國主義の波の原動力が經濟的動機であつたという見解にとつて、まことに不都合な証拠をもみずから提供している。のみならず、この時代におけるその他の帝國主義的領土獲得の諸例をつぶさに検討しておれば、そのうちの若干の例は、主要な資本形成列強の投資または公債を助長もしくは保護することを第一の目的として力が行使されていたという説明に、あまり適合しないことを発見したのである。また投機的な資本をひきつける魅力の点で産金丘陵地ほど明瞭でない領地が併合されたり、エジプトの副王の場合と比較して問題にならないほど少額しか

借りていない無能な政府が転覆されたりしている例を拵見したであろう。さきに指摘しような戦略的動機のようなよしおそらく第二義のものにせよ、有力な動機がほかにも働いていたことは明白である。すなわち、サハラ砂漠のような、地図ではむしろ将来性の乏しい部分が、資本剰余を形成する能力の点で一九世紀のイギリスより明かに劣っていたフランスのような国によって併合された。おそらくこれらの事件においては、軍事的戦略とならんで、生のままの張合いの精神がひと役を果したのである』（『終末』原本九六—七ページ。訳本一三一—二ページ）。以上の引用はそもそも何を語るものであろうか。帝國主義的行動を促す要因は、けっして単純ではなくて複雑だということである。現実には経済的利益のほか戦略的重要性、民族的矜持、国際競争意識などいろいろの要因がはたらいっており、経済的な要因に経済外的な要因がからみ合ったり、経済外的要因がむしろ主たる役割を演ずることもあるとうことである。こう見てくると、ストレーチーはさながら多元論者であるらしく受けとられよう。

しかし問題は、典型的な事例について一切の夾雑物を除いた場合に何が決定的要因として残るかにあるであろう。『主要な国家の活動の最も稔り多き分析は、当該国家内の最も影響力のある市民たちの富を追求する性向によってなされうる』（『終末』原本一二二ページ、訳本一六八ページ）。そう信ずるストレーチーは、結局のところ、先進諸国の国内における投資機会の減退——過剰資本の海外輸出——低開発諸国の植民地化という一連の関係をば、『否定しがたい傾向』として認め、これをもつて資本主義的帝國主義の最有力な因子と見るレーニンの説に同意するのだが、しかしこの関係は資本主義にいつまでもつきまとう宿命ではなく、限られた期間において妥当するにすぎない。民主主義的政治勢力の浸透によって、資本主義の体質改善が進めば進むほど、過剰資本の圧力が先進資本主義国を駆って海外投資にむかわせようとする衝動は、ますます弱化する。かくて資本主義的帝國主義の時代は、今次の第二次

大戦をもって終りをつけ、帝国主義はいまや急速に崩壊の一途をたどりつつある。現代はまさしく帝国主義の解体 (disimperialism) の時代であり、帝国主義を乗り越えた後の時代 (postimperial period) であるとストレーチーは説く。ここに彼の新しい感覚があり、異色ある問題設定のおこなわれる根拠がある。すなわち彼にとつて主要な問題は、帝国主義の終末はなぜ起つたか、それはいかなる含蓄と影響をもつか、帝国主義は復活しないか、今後われわれは情勢の変化に即応していかに対処すべきであるか、等々ということではなくてはならない (一九六二・八)。

附記 引用句の訳文は、既出の邦訳書に拘泥せず、自由に訳出した個所がある。